

官民一体となり帯広単独開催へ

存続の危機にさらされたばんえい競馬は、土壇場で帯広市の単独開催が決定。施設を一新して再スタートを切るようになります。



スタンドに新設された大型看板と入口アーチ。

民間支援の下で「ばんえい十勝」が発足

「廃止は確実」と見られていたばんえい競馬ですが、岩見沢の撤退表明から二週間後、急展開を見せます。十二月十四日、砂川帯広市長は民間の支援を得て、帯広市単独でばんえい競馬を存続させる意向を表明。その内容は、ばんえい支援を申し出たIT業界の大手企業ソフトバンクの子会社ソフトバンク・プレイヤーズが設立する新会社に対し、競馬法で認められている範囲の業務を委託し、同社グループの経営手法を導入して収支均衡を図る、というものでした。

まさに、ばんえいのレース展開に勝るとも劣らない土壇場の逆転劇。こうして、帯広市と新会社オッズパーク・ばんえい・マネジメント株式会社による新生ばんえい競馬が誕生。「ばんえい十勝」の名の下、再スタートを切るようになりました。「十勝」としたのは、馬産地である十勝をアピールすると同時に、縁起の良い「10勝」の意味も込められていました。

誰もが訪れやすいように生まれ変わった帯広競馬場

新生「ばんえい十勝」は、初年度の開幕に向けて競馬場の施設を改善し、イメージを一新。スタンドの外壁はモスグリーンに塗り替えられました。この内壁の塗装にあたっては約百名の市民ボランティアたちでした。また、来場者を迎える入口側の壁面には、ばん馬の迫力を伝える大型看板と入口アーチが新設されました。

スタンド内には、インフォメーションコーナーやグッズ販売コーナー、ばんえい競馬の紹介パネル、キッズルームなどを設け、観光客や家族連れも楽しめるよう配慮。また、場内の分煙化を徹底し、トイレを全面改装、ゴミ箱を多数設置するなど、女性も訪れやすい清潔感のある環境に生まれ変わりました。

スタンドの外も大幅に見直され、コースに並行して観戦できるエキサイトゾーンを拡大。それまでスタンドの南側にあったパドックはゴール付近に移され、パドックとレースをほとんど移動せずに見ることができるよう

になりました。パドックの跡地には、ふれあい動物園や各種イベントコーナーが設けられ、市民が気軽に足を運べる新スポットへと姿を変えました。

幕を開けた「ばんえい十勝」初年度は好調な滑り出し

平成十九年四月二十七日、いよいよ新生「ばんえい十勝」が幕を開けました。四日間に渡って開催されたオープニングイベントに

は、多くの市民やファンが訪れ、レースとともに多彩な催しを楽しむ地元の子どもの姿も数多く見られました。

六月十六日からは、ばんえいで初となるナイター競馬がスタート。これに合わせて、スタンド三階の特別席からゆったりと観戦できるプレミアムラウンジがオープンします。イルミネーションをバックにした白熱のレースは、以来、ナイター開催時期の風物詩となりました。また、ばんえい競馬馬主協会の主催で、JRA（日本



スタンド3階に設けられたプレミアムラウンジ。

中央競馬会)のトップジョッキーとの交流イベントが始まったのも同年。こちらも恒例行事となり、現在も多くのファンを楽しませて

います。このほか、帯広商工会議所が中心となっている「とかちばん馬まつり」、NPO法人「とかち馬文化を支える会」による馬文化イベント、地元企業とのタイアップイベントなど、多くの催事が実施され、好評を博しました。こうして幕を閉じた初年度の入場者数は、前年度をはるかに上回る約二十三万七千人。関係者や支援企業が力を合わせ、施策に努めた結果でした。



ばんえい初、イルミネーションに彩られたナイター競馬を開始。



「ばんえい十勝」オープニングセレモニーで開幕挨拶に立つ砂川帯広市長（中央）と関係者。



オープニングセレモニーにて陸上自衛隊第5音楽隊が新ファンファーレを披露。



騎手を乗せたばん馬が市内に練り出し、開幕パレードを実施。



「おびひろ氷まつり」と連動して競馬場にもばん馬の水像が登場。